九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

生活様式論をめぐる諸問題 : 生活様式概念の活性化のために

野澤, 秀樹

https://doi.org/10.15017/2230469

出版情報：史淵. 125, pp.179-206, 1988-03-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

生活様式論をめぐる諸問題

――生活様式概念の活性化のために――

野澤秀樹

はじめに

フランス人文地理学史の中で、「生活様式」がきわめて重要な概念であることについては周知のことであろう。この言葉がフランス地理学派に広く用いられるようになったのは、学派の創立者ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュその人に負っている。生活様式はヴィダル地理学そのものといっても過言でないほど重要なものであるが、その概念内容については先きの拙稿で論じたので、詳細はそれに譲るが、それは次のように要約されるであろう（野澤、一九八七）。（一）自然と人間との地理的共同労作であること。（二）自律性をもち、社会の型として地表に刻み付けられた文明であること。（三）習慣として、人間集団を規定する地理的因子であること。（四）生活・生産に係わる物質的なものと習慣、宗教、儀礼などの制度的、心的なもので構成されている。以上のように、まとめられる生活様式は、実際にはヴィダルにおいてはきわめて生物的な面に力点がおかれており、自然との係わりの強い狩猟・採集、漁業、牧畜、農業、とくに後二者の生活様式が取り上げられたのであった。したがって、ヴィダルの唱道の下に進められた地域研究は自然と人間が調和したフランス農村の姿を捉えることを狙ったのである。その姿は現実にはすでに旧社会の残影に過ぎないものであったが、彼の門弟たちはこの概念を用いることによって兎も角も、地域の生活を自然と人間の総合

として描き上げることができたのである（野澤、一九八六）。このような視点からの地域モノグラフィはほぼ第二次世界大戦頃まで行われ、フランス地誌学派の黄金時代を築いて来たのである（Claval et Juillard, 1967; Meynier, 1969; Thibault, 1972）。しかし、このような自然と人間との調和したヴィダル的な生活様式概念で捉えうる地域はすでに過去のものとなっていたのである。また他方ではヴィダルが『東部フランス』で示した一般的関係の分析は忘れ去られたままであった。そうした地域研究の方向にはっきりと変化が見え始めるのは一九五〇年前後であろう。地域モノグラフィの変化については別に取り上げねばならないが、このような地域研究の変化はこれまでの伝統的地理学の批判を伴っており、その批判が伝統的地理学の主要概念であった生活様式のそれに向けられたのは当然であった。したがって、戦後フランスにおける生活様式批判は伝統的地理学に対する批判として受け止めることができる。

戦後のフランスにおける生活様式批判はヴィダル的な生活様式概念のもつ困難を批判しつつ、現代社会への適応可能性を探るソール（Sorre, 1948, 1952）、それをマルクス主義の立場から批判するジョルジュ（George, 1951）を中心にして展開した。また我が国でもちょうど同じ頃、飯塚浩二（飯塚、一九四七、一九五〇）によってフランス学派の生活様式が検討されており、これが後に大きな影響を与えることになる。ところで我が国では、ヴィダルを中心にしたフランス学派の生活様式概念や戦後の批判的論議についてはすでにふるく谷岡武雄（谷岡、一九五五）、松田信（松田、一九五五、一九六一）らによって詳細に紹介されており、また先の飯塚についても彼を批判的に継承するという上野登（上野、一九六八）の生活様式批判によって決着がついているかの感を呈している。こうした状況の中にあって、筆者が今まさにこれを改めて取り上げようとするのは、それなりの理由がなければならないであろう。それには二つの理由がある。その一つはヴィダルの生活様式概念を批判する中で、ヴィダル概念の持っていた豊かさが切り取られてしまったこと、その失われてしまった部分を呼び戻すことによって現代社会の分析に相応しい概念として活性化をはかることができないかどうかということである。今一つは第一の批判点と関連して来るのであるが、我が国における生

活様式批判とそれを通じて理解されるヴィダル解釈が正当であるかどうかという問題である。これらの二点を中心にして生活様式概念の再検討をおこなうことにしよう。なおすでに述べたように我が国ではヴィダル以来の概念から戦後の批判に至るまで詳細な紹介がなされているので、それを繰り返すことはせず、本稿のテーマの理解を容易にする限りで、戦後のフランスでみられた生活様式概念をめぐる議論の要点を述べておくことにしたい。

一　フランスにおける生活様式批判

（一）フランス地理学において、事実認定に関しての批判はしばしばみられるが、概念そのものを批判的に問うということはなかったのではないか。フランスでは概念そのものをあまり問題にすることがないから、それは当然のことかも知れない。そうした中で「生活様式」の概念をめぐる議論は例外的なことに属しよう。四〇年以上にわたって何ら批判的な検討の加えられることのなかった生活様式概念に対して問題提起がなされたのは、第二次大戦も終結し、漸く世の中が落ち着きを取り戻した一九四七、八年から五〇年代の初めにかけての頃である。

戦後いち早く伝統的地理学批判を展開したのは、のちメガロポリスの名著で名をはせたゴットマン（Gottoman, 1947）であった。彼は「生活様式は何よりも記述の道具であり、生活様式の原理は地域主義の中にあり、何ら一般的概念に道を開いていない」（Gottoman, 1947, 3）と手厳しく批判する。ヴィダル以来の伝統的地理学はヴィダルが指導したようにローカルな土地自然との関係から地方の相観を捉えることに努力してきたが、そこでは生活様式が記述の道具として有効性を発揮してきたことは事実であり、ゴットマンのいう「生活様式の原理は地域主義にあった」というのはそのことを意味している。ゴットマン自身は生活様式に代わって「十字路」carrefour の概念を提唱し、それによって、ローカルな土地環境との関係から地域を構成する地表上の動き、流動をダイナミックに捉えることを提起した。実はこのゴットマンの主張は、ヴィダルの「普遍的関係」から地域を捉えようとするものと同一の視点なの

であるが、この方面の研究はヴィダル以後忘れさられていたため、ゴットマンの批判は伝統的地理学に対する痛烈な一撃となった。現実の地表面の現象はゴットマンのいうように人、物質、エネルギー、情報などの流動、動き、いわゆるヴィダルの「普遍的流れ」が一般的であった。彼はこのような普遍的関係を捉えることはもはや生活様式の概念においては不可能になったことを指摘したのであった。このことはすでにヴィダルの時代にも明らかになりつつあったが、ヴィダルはそれを承知しつつ、まず失われつつあるローカルな関係の研究に進んだのである。しかし、両大戦を経過し、地表の諸現象は「普遍的関係」が一般化していたことは争う余地はなかった。ゴットマンの主張はまさにそうした時代を反映しているのである。ゴットマンはこのような状況において地理学方法論として生活様式の無力を批判したのであったが、一方、現代社会においても生活様式概念の適応可能性を追究しようとした人たちの中にジベール、ソール（Gibert, 1948; Sorre, 1948, 1952）らがいる。

（二）ジベールは「生活様式」という表現は「地域経済」という言葉がもつ純粋に物質的なものよりも、ずっと豊かで包括的であるという。なぜなら、前者は生活必需物質を獲得するための諸活動を含むだけでなく、習慣、儀礼、社会的関係といった精神的なものまでも包括しているからである。この文脈からすれば、ジベールは生活様式概念において彼の指摘の後半部分に力点をおいていることになる。事実、彼は生活様式を人間によって作られた地理的因子であることを強調している（Gibert, 1948, 260）。この生活様式のもつ二つの側面はヴィダルの概念にも含まれていたものであるが、ヴィダルでは第二の面について十分具体的に展開されず終ったものである。それはすでに筆者が推測したように、この方面はヴィダル派の好敵手であったデュルケーム派の社会形態学のよくするところであったからであろう。事実ル・ラヌーはジベールのこの指摘を取り上げ、生活様式の精神的、社会的側面は社会学のものであると、地理学から除いている（Le Lannou, 1949）。

ところで、ジベールは上の二つの内容をもつ生活様式概念を近代社会にどのように適用しようとするのであろうか。ジベールは近代社会を多くの活動が隣り合い、助け合いさまざまな職業をもつものが連帯している高度な技術水準にある工業生産社会であると規定し、そうした中で、物を作る製造者の工業的生活様式 genre de vie *industriel*, 物を交換する商人的生活様式 genre de vie *commercant*, 組織するものとしての役人的生活様式 genre de vie *fonctionnaire* の三生活様式を区別している。第三の生活様式の内容、命名にはなお生硬さが残るが、それは兎も角として、これらの生活様式はそれを構成している成員の生産活動にはそれぞれ違いがあるにしても、一般的な消費活動、社会生活においては程度、水準の違いであり、質的には同一であるとする。つまりジベールは近代社会においては職業による生活様式を捉えることによって分析が可能だと考えているのである。この考えを一層厳密に推し進めたのがソールである。

ソールはまず生活様式を「技術の結合」combinaison de technique と定義する（Sorre, 1948, 97）。彼による技術とはそれぞれの生活様式がとる生活、生産上の物質的方法 recettes materielles と宗教、儀礼などの精神的なものを含むものである（Sorre, 1948, 98）。ヴィダルも生活様式を技術とみていたと考えてもおかしくないことは別稿の生活様式の定義から明らかである（野澤、一九八七）。そこでソール流にヴィダルの概念を言い直せば、「技術の総体である生活様式は地理的環境への人間集団の活動的適応形態」（Sorre, 1948, 100）ということになる。ソールはヴィダルの生活様式概念を彼流に読み代えているのであるが、ヴィダルのそれより明確になっているところが一つある。それは生活様式の進化についてである。ヴィダルにおいて、それは外部との接触によってのみ起こるものであるが、[1] ソールにあっては内的原因と外的原因に分けて考察されている。外的原因はヴィダルの接触であるからここでは問わない。ソールのあげている内的原因は発明、人口増大、社会組織の進歩—これは分業のこと—である。ソールはここで最後の分業概念を導入することによって、近代社会においても生活様式概念が適用可能であると考えるのである。近代社会においては農業と工業の二大職業集団の分離が顕著になり、とくに後者の重要性が増して来ることである。近代社

会の生活様式の分化は職業的専門化にもとづいており、自律性と安定性をもつというヴィダル的意味ではそれ自体生活様式の解体なのであるが、このような職業分化は創造的な役割を果たす交通の発達によって一層促進される。近代的生活様式を象徴する都市的生活様式は、ソールの例を上げれば、農村に出現した工場労働者の町、交通の要衝に発達した鉄道職員の町、あるいは炭坑夫の町などであって、これらの都市の生活はもはや旧来の社会の混合的生活様式ではなく、職業の必要性に支配された生活様式を営んでいる（Sorre, 1948, 203）。また大都市での内部の街区の専門化は生活水準と職業とに関連した（二次的な）生活様式として把握されるものである（Sorre, 1948, 203）。以上のようにみてくると、近代的な生活様式を特徴づけるのは社会経済組織にもとづく職業分化とさらに社会階級の特徴である生活水準ということになろう（Sorre, 1952, 35）。こうしてソールは生活様式概念を、ヴィダルの環境に対する集団の様式という面から、個人の面における技術として捉えることによって、近代社会の説明的記述にも拡張し得ると考えるのである。ソールの「技術」概念を理解するためには、彼の地理学体系全体を考察しなければならないのであるが、ここでみる限りはあまり明瞭とはいえない。いずれにしても、結局ソールの近代生活様式概念は、専門化にもとづく職業分化と生活水準というかなり社会学的な概念になっている。以上のジベール、さらに、ソールの近代社会への生活様式概念の拡大適用に関して、マルクス主義的な立場から鋭い批判を行なったのが、当時ソールとソルボンヌの同僚であり、気鋭の地理学者であったピエール・ジョルジュである。

（三）ジョルジュによれば、生活様式の概念は未開社会の研究において、出発点としては有効であり、便宜でもあるという。というのはこの概念が集団の活動 activités の原動力を調べ上げることから出発し、ある与えられた環境において、集団が自由にしうる技術によって生活必需物資を調達する生存手段を追究し、次いでその原動力を中心に集団が帯びる諸表徴を捉えるところにあるからという（George, 1951, 73）。これをマルクス主義的に言い換えれば、

活動の原動力は集団の生産力であり、それを下部構造として、その上に社会組織、慣習、宗教、儀礼などの上部構造が乗っているということである。このような比較的単純な社会においては生活様式でも分析が可能なのである。

ところで、上でみたようにソールは分業と職業分化に基づく細分された職業的生活様式群によって特徴づけられる近代社会では、分業と職業の分化の概念を導入することで、生活様式概念を近代社会に適用可能であると考えたのであるが、ジョルジュによれば、進化した経済社会が問題になるとき分業や職業分化の概念を導入することは不適当であるという。なぜならこれらの事実からは、文明化された生活様式と古風な生活様式との間にはもはや共通の尺度はないのであり、活動と生産という根本的な混同があるだけだからという。従って、ジョルジュによれば、生活様式は、植民地経済を含めて、産業革命後の複合的な経済社会においてもはや説明であることはできず、ただ単に記述でしかなく、その結果生活様式の研究は見本を列挙するに過ぎないものとなる（George, 1951, 74−5）。問題は地理学が活動の外面形態を分類するだけにとどまるか、あるいは生活様式の骨格を対象として取り上げるかどうかということである。もし後者を地理学の課題にするならば、生活様式ではなく、経済・社会構造によらなければならない、というのがジョルジュの主張である。確かにソールも近代的生活様式は〈経済・社会地理的複合〉によって定義されるとしているのだが、ジョルジュによればソールの生活様式の内容は空虚であり、その内容は経済社会組織の形態に横滑りしてしまっていると、批判する（George, 1951, 76）。ソールは分化した職業の生活様式をもって近代社会のそれを捉えようとしたが、ジョルジュによればそうではなくそれぞれの職業集団の生活様式を規定している経済・社会制度（systems）に拠るべきであるとしたのである。

ジョルジュは以上のように生活様式概念を、ソールの社会学的概念（ジョルジュによれば社会学においては問題にならない概念であるという）から経済学の概念への転回を図ったのである。上述のジョルジュの指摘はただ単に生活様式概念の批判にとどまらず、伝統的地理学の方法論批判として捉えるべきものであり、これによって戦後のフラン

スにおける地域研究も大きな変化を見せ始めたのである（野澤、一九六七）。

ジョルジュによる批判の以後、フランスにおいて生活様式概念は決着をみたように思われる。後、デェリュオー（Derruau, 1969, 116）は人文地理学の概説書において、以上の論議を踏まえて生活様式概念の整理を試み、近代社会において生活様式を説明するのは経済型であるとし、「生活様式は経済・社会組織への集団の応答である」と結論づけた。しかし、デェリュオーは経済構造が規定的であるとしても、ローカルな環境から独立した地理的事実があるかどうかと問い直し、「環境」から「経済・社会組織」へと移行したといっても、ローカルな条件は全く生産に影響しないわけではなく、環境が無視しえない存在であることを確認する。そして、それは経済構造の地理学と環境の影響の地理学との間の選択の問題ではなく、相互に結びつくものであると妥協を図っている。[2] しかし、デェリュオーのいうように環境への適用を問題とする地理学の方は生活様式概念を有効に利用したかどうか疑わしい。現にジョルジュすら適用可能とした未開社会でも、それは今日「低開発問題」として把握されなければならないのであり、そこでは生活様式概念では無力となってきているのである（Lacoste, 1964, 45―46）。このようにみるとき近代社会においては生活様式概念は全く適用性を失ってしまったのであろうか。ジョルジュの批判は社会を上部構造―下部構造として捉え、後者が前者を規定するといった旧来のマルクス主義的立場から批判するものであり、いわば生活様式概念の経済(学)主義化を図っている。これによって確かに生活様式は近代社会をも分析する道具となるであろう。しかしジョルジュが「生活様式か経済・社会構造か」と二者択一的に提起したように、ジョルジュのそれはすでにヴィダルが求めようとしたところ本来の生活様式ではなく、その一部である物質的生産の面から経済学の概念で以て厳密化したのであり、本来の生活様式の面からみれば狭小化と言えなくもないのである。それでは本来の生活様式とは何なのか、それを近代社会における地理学方法論に生かす方途はあるのか、これが問題である。これに対するその糸口だけでも見出そうとするのが本稿の目的であるが、それはジョルジュが行なったような生活様式概念を生産の面にだけ

限った経済学の概念で置き換え、経済(学)主義化することではない。生活様式はもっと包括的な概念であったことを想起する必要があろう。その問題に入る前に、我が国でみられたヴィダル地理学の批判的継承について一瞥を加えておきたい。それは、丁度上でみて来たジョルジュの生活様式批判に対応するものであるが、そこにはヴィダルに対する無理解があり、それを捉え直すことによって、ヴィダルの生活様式概念を一方的にジョルジュ的な経済(学)主義化を許さない根拠を指摘し得ると考えるのである。

二　我が国におけるヴィダル生活様式概念の批判的継承とその問題点

(一) ヴィダルを中心にしたフランス地理学を我が国に精力的に紹介し、自らもそこから地理学思想の糧を得て、地理学観を大成させ、我が国の地理学界に大きな影響を与えたのが飯塚浩二である。飯塚浩二論についてはすでに優れた論攷もみられるので、それらに譲り(水津、一九七一、岡田、一九七五、一九八一)、ここでは生活様式概念に限って、飯塚がヴィダルの概念をどのように捉え、如何に展開させていったかをみることにしよう。

飯塚は人文地理学の歴史は「人類と自然、あるいは歴史と舞台」をめぐる関係を課題として、リッター→ラッツェル→ヴィダルへと継承発展して来たと捉える(飯塚、一九三二、一九四〇、一九四七)。これまで形而上学の課題であったこの問題を個別科学である地理学のそれとして確立したのはリッターであったが、彼にはなお、神学的、目的論的残滓があったとして、それに対してラッツェルはヘッケルの生態学を介して、進化論思想を地理学に導入し、生命の諸現象を法則的に理解する統一的世界観にたって人間と環境との関係を〝科学的〟に取り扱う道を拓いた。しかし飯塚によれば、ラッツェルはそれを機械論的な運動として捉え、唯物論的機械論に立っていたため、人類を生物学的人間として取り扱い、歴史的、社会的存在としての人類を無視する結果に陥ってしまったという。このラッツェル的欠陥から地理学を救い、人類の本来あるべき性質である社会的、歴史的存在としての人類を取り扱う道を切り拓いたの

がヴィダルであり、人文地理学の発達史上第三段階に位置付けられるとされるのである（飯塚、一九三二、七、一九四〇／七〇、一九、一九四七、一五三）[3]。

飯塚はかくて、学史的にみて且つ学問の分業という点からみて、人文地理学の課題を人類と自然（環境）との関係におくことに賛意を表する[4]。そして飯塚はこの人類と自然との関係・交渉は二つのレベルにおいて行なわれているとする（飯塚、一九三二、一九四〇／七〇、一九四七）。第一は肉体的、生理的な機構を介して交渉しているという、生物学的レベル。第二は社会的な生産過程を介して、すなわち技術的手段や生産機構において自然と交渉するもので、これは純然たる社会科学のレベルにおける関係である。そして、第二レベルの社会的な生産過程は明らかに歴史に従っているのであるから、人類社会と自然との交渉関係は歴史的な発展の相において把握さるべきものであるとされる（飯塚、一九三二、四、一九四七、一四七）。このように人類の地理学的諸現象には生理学的に基礎づけられるべき生物地理学的な部面に属するものと、人類社会の構造をその発展の論理において把握さるべき部面とがあり、この後者の面こそ本質的に人文地理学的な部面とされる。飯塚がヴィダルを評価するのは、歴史的見地の導入、あるいは社会的、歴史的存在としての人類を取り扱う途を拓いたという点であったが、それはこの第二の面、すなわち歴史的、社会的な生産過程である技術的手段、生産機構を介して人類が自然と交渉する面をヴィダルが捉えんとしたと理解したからであろう。このことからすれば、飯塚の「歴史的生産手段、社会的生産機構」はヴィダルにおける「生活様式」をおいて他には考えられない。果たしてどうであろうか。飯塚はあるところでは、前者を媒介とした地理的環境への適応の具体的な表現（形態）として「生活様式」を理解している（飯塚、一九四九、一七一）。またあるところでは、「自然的環境と人類社会とのつながり、主としていわゆる物質生活、生産に集中された営みをさすもの」（飯塚、一九五〇、二一七）として、前者の面で使っている。「生活様式」を「歴史的生産手段、社会的生産機構」の結果（表現形態）としてみるか、そのものとみるかでは本質的な違いがある。果たして飯塚のいうようにヴィダルの生活様式は「歴史的

生産手段、社会的生産機構」そのものなのか、あるいはそれを介した表現（形態）、すなわち結果なのかいずれであろうか、今一度ヴィダルの生活様式概念に立ち戻って検討してみなくてはならない。

ヴィダルの生活様式概念はまず第一に、人類が生物として自然と共同していく面、第二に人類が次第に創意、工夫によって自然から解放され、集団の様式を作り上げて行く面、それはさらに、人間集団を規定する地理的因子として作用する面とがある。その内容は生活・生産手段を獲得し、それによって生存を維持して行く物質的な面と習慣、宗教、儀礼のような制度化、心的な面とがあるが、いずれもが長年月の間に凝結した「習慣の総体」となったもので、それが人間集団の生活を導き、あるいは地理的因子として作用するのである。このような内容をもつヴィダルの生活様式において、第一の自然と人間が共同する面は飯塚のいう肉体的、生理的機構を介して自然と交渉するという生物学的レベルにあたるものであるが、問題は飯塚の第二の点である。飯塚のいう「技術的手段、生産機構」というのは、確かにヴィダルのいう生活様式の構成内容における物質的な面に当たっているように思われる。ところで上にみて来たように、飯塚は生産手段、生産機構を媒介した表現形態（結果）として生活様式をみている。一方、ヴィダルの生活様式は生産手段の他精神的なものも含む習慣の総体であるとして、作用するもの（地理的因子）とされている（ヴィダルが実際にこの生活様式を作用する地理的因子として具体的研究に生かしているかどうかは別にして）。すでに述べたように飯塚にも生活様式を「営み」としてみなしているところがあるので、そこで仮に生活様式を結果としてでなく、飯塚の「歴史的生産手段、社会的生産機構」をヴィダルの「生活様式」そのものとして理解するとどうなるであろうか。

ヴィダルの生活様式が歴史的に形成されていくものであることは言うまでもないとしても、飯塚の期待するような発展段階的に規定されるところの歴史的生産手段、社会的生産機構であると言い切れるかどうかにまず問題がある。我々は先の論文で詳細にヴィダルの生活様式概念を分析してきたように、ヴィダルは飯塚の第一点に、とくに力点を

おいていたこと、また第二の点に関しては歴史的事実を呈示するに終っており、生産手段、生産機構の営み、作用というよりは、それらも含め習慣化された生活の型＝文明を問題にしていたのであった。従って、飯塚がヴィダルの生活様式を「歴史的な生産手段、社会的な生産機構」を介しての表現（形態）とみたのにはそれなりの理由があったわけである。そこで飯塚自身ヴィダルの生活様式概念の内容に不十分さを感じ、飯塚流の読み代えを行なって行くのである。まず飯塚は生活様式概念の批判―ヴィダルを名指ししてはいないのだが―を行なって行く。

飯塚は、生活様式を単純に視覚的なものと解し、経済学が資本主義のための理論であるのに対し、地理学は生活様式を用いて異国的なそれの分類を試みるという観点から、実際上は資本主義以前の範疇にぞくする諸類型の平面的な比較を行なうにすぎず、生活様式はそのための手段になっているとして批判するのである（飯塚、一九五〇、二七九）。この生活様式批判は上述したジョルジュのそれに通じるものがあるが、要するに飯塚は生活様式は表面的な分類の手段にすぎないのであって、段階規定的な歴史的な範疇に属する概念とは認めていないわけである。しからば飯塚のヴィダルを評価する点はどこにいったのか。飯塚は間違いなく人類と環境との交渉における第二の面―本質的に人文地理学的な部面とされた「歴史的な生産手段、社会的な生産機構」を介して交渉する面―をヴィダルの地理学、すなわち彼の生活様式にみようとしたと思われる。なぜなら飯塚はその点でヴィダルを評価したのであったから。しかし実際にヴィダルの生活様式は飯塚の期待する「歴史的生産手段、社会的生産機構」ではなく、その結果に過ぎないものであった。そこで飯塚は上で示唆したように、生活様式の読み代えを行ない、「生産関係」にそれを置き換えるのである。我々はジョルジュの批判においてみてきたように、ヴィダルの生活様式概念は経済学の視点からみるときわめて曖昧さを含むものであることは認めざるをえないのであるが、しかしだからといって、飯塚のいうように「生産関係」という経済学の概念に解消されてしまうのかどうか検討の余地があろう（Takeuchi, 1984）。もともとヴィダルに飯塚が期待しているような視点、すなわち発展段階的なそれがあったかどうか。このような疑問については、飯塚の考えを

批判的に継承発展させたという上野についてもあてはまるので、まず上野のヴィダル地理学、とくに生活様式に対する視点をみておこう。

（二）上述のようにヴィダルを中心としたフランス地理学をバネにして自らの地理学理論を形成して行った飯塚浩二の批判的継承を試みたのが上野登である。飯塚の場合、ヴィダルに対する批判的検討は曖昧のままに済まされたが、上野は批判点を明確にし、飯塚を介してヴィダル地理学の継承視点を提示している。上野のヴィダル地理学の継承視点は人文地理学原理の全体に及ぶが、我々は上の関係から、生活様式概念に限って問題にしよう。しかしヴィダルにおいては生活様式が最重要概念であるから、彼の地理学の本質面は逃れてはいない。

さてヴィダルの生活様式概念をめぐって、上野のヴィダル地理学の継承視点を取り上げる前に、上野が理解しているヴィダルの地理学の諸概念について検討しておかなければならない。まず第一は上野が用いているヴィダルの生活様式概念についてである。上野はヴィダルの様式概念はあまりに漠然としており、『原理』の全巻を通じて何ら説明もないという（上野、一九六八、三九）。確かに彼の概念規定には曖昧な点はあるにしても、彼には生活様式を主題とした論文があり、その他にも種々の論文で生活様式に度々触れており、それらを合わせてみればかなり鮮明な生活様式概念像が浮かんで来るのである（野澤、一九八七）。そこでまず上野が、ヴィダルが生活様式をはじめ耕作様式、文明様式、輸送様式などの多くの「様式」概念を使用しているところから、「生活様式」概念を他の「諸様式」概念の中の一つとみなしている点である（上野、一九六八、三二）[5]。しかしこれは上野の誤解であって、生活様式概念はそれ以外の様式概念を含む一般的概念として使用していることは一八八八年の論文に初出以来各種論文に使用されている例をみれば明らかである。もし上野がこの一般的概念である生活様式を耕作様式や輸送様式と並列的のものとして理解されているとしたら出発点から問題が生ずることになろう。[6]

次にこれらの諸様式（生活様式）を上野が生理的に機能しているとみる点である（上野、一九六八、二五―二六）。確かにヴィダルは生活様式を地理的因子とみており、自然に対してだけでなく、人間集団にも作用する生理学的概念として理解していたとみることが可能である。しかし、実際にヴィダルが使用している生活様式はむしろ型式の意味で使用していることが多く（食糧獲得の仕方、作物の組み合わせ、耕作用の道具、建築の材料、家屋の型式、輸送手段）、こうした類のものの総体（原理的にはこれに精神的なものが含まれるが）によって人類集団が作り上げた文明の型を生活様式と呼んでいるのである。だから上野のいうように作用・行為様式＝生理的というよりは存在様式＝形態学的な概念に近いと言ったほうがよいと思われる（その点ではさきにみた飯塚の生産手段、生産機構の表現形態という捉え方は当を得ている）[7]。

第三に、ヴィダルは生活様式のいくつかの類型、とくに牧畜、農耕の生活様式を詳細にわたって論述しているが（狩猟・採集、都市的、工業的生活様式について簡単に触れているが、上記の類型ほど正確にそれぞれの生活様式を記述しているわけではない）、飯塚（飯塚、一九四七、五三、一九六八、一〇五）と同様に上野もこれら生活様式の諸類型を経済史的な発展段階的記述と捉えている。これは両氏の手前勝手な解釈であって、ヴィダルは決して上述の類型を発展段階的には捉えていない。そうではなくそれらの生活様式は様々な環境との対応によって作り上げられた空間的な類型である。このことについてはすでにフェーブルがヴィダルを正しく理解し、経済学者の三段階説を批判し、経済類型よりも複雑な人間社会の諸類型＝生活様式の重要性を指摘している（Febvre, 1922, 訳, 105）。このようにヴィダルの生活様式概念は経済的な面には限られないのであり、ましてこれを発展段階的な叙述とみるのは明らかに誤解である。

なお生活様式概念とは直接関係しないが、上野のヴィダル理解について若干触れておきたい。その一つは上野がヴィダルをきわめて民主主義的な地域観の持主で、進歩的であったと理解する点である（上野、一九六八、二七）。我々はヴィ

ダルが文明の平等性を説くなど民主的なことを認めることにやぶさかでないが、すでに入江敏夫が指摘したように（入江、一九七五）、ヴィダルは王党派ではないにしても、体制派（第三共和政の）であり、愛国者、保守主義者であったことは近年の地理学史における contextual approach が明らかにしたところである（Berdoulay, 1981, Broc, 1970）。上野が民主主義的地域観として評価する郷土、原核（小さな風土的社会集団）は逆にきわめて保守的なものと理解すべきなのである。[8]

もう一つは上野がヴィダルの地理学を次のように捉える点である。「地理学を分析の科学として、たにん過去の人類の地表への刻印の明細表のみではなく、現在進行している変革から将来への予測までおこなって、必然性を主張しようとしたことの意義は、強調してもあまりあるくらいに大きい」（上野、一九六八、三九）と、ヴィダルの地理学が分析の科学として、必然性を主張したと高く評価するのであるが、何を根拠にこのような主張がなされるのだろうか。上野の現在進行している変革云々の文章はヴィダルが生物界について述べているものを勝手に人間界に解釈したものであり、[9] また必然性云々についてはヴィダルはあらゆる地表の諸現象を偶然とみなし、ドグマチックな定式化を避けたのではなかったか。

以上のように、上野にはヴィダル地理学に対する思い入れ的理解—むしろ無理解といったほうがよいのであるが—があり、これ以上検討の必要もないのであるが、生活様式の批判的継承点のみをみておこう。

上野はヴィダルの生活様式概念を直感的、景観的概念と理解し、その生理的必然性の論理が明確に浮かんでこないと批判し（上野、一九六八、四〇）、その生理学にあたるものを飯塚に倣って経済学、経済史学に求め、これによってヴィダルの論理の欠陥の克服を図る。そして上野は彼のいうところの生活様式、耕作様式、輸送様式などの諸様式を基礎において捉える一般的、普遍的様式の〝発見〟に努め、飯塚の「生産関係」を退けて、ヘーゲル、マルクスの論理展開を援用してヴィダルの生活様式を「生産様式」へと止揚し、地理学の経済（学）主義化を徹底するのである。

ヴィダルの生活様式の概念を飯塚や上野のように「生産関係」、「生産様式」の概念で置き換えることは、フランスにおいてジョルジュによって行なわれたように、確かに可能であろう。生活様式という曖昧な概念にそれらの概念を導入することによって、論理的に厳密化されることは疑いない。しかしそれですべてが解決するであろうか。生活様式が生産関係や生産様式に置き換え可能な部分は生活様式の一面、すなわち生活様式のもつ物質的生産の面でしかない。その他の面については、当時のジョルジュのように旧来のマルクス主義的に下部構造が上部構造を規定するといったような公式主義的解釈で済ますわけにはいかないのである。ヴィダルの生活様式はもっと包括的で、豊かな内容をもった概念であった。しかしヴィダルの生活様式概念の包括性だけを主張しても何の問題の解決にはならないであろう。それでは生活様式を経済学の概念に解消するのではなく、地理学固有の概念として現代に活性化する方法はどこにあるのだろうか。

五〇年代後半から六〇年代にかけて地理学界に大きな渦を巻き起こした理論・計量地理学革命は周知のとうり伝統的地理学批判より起こったものであったが、その一つに伝統的地理学の「地誌」がもつ全体性 as a whole の概念に対しての批判があった。革命派は全体性の科学的価値を批判し、それに対して分析的で、理論的に厳密な理論的地理学の確立を目指したのである。その運動の一つの発端の役割を果たしたものに、古典的立地論があったが、それは立地論＝経済学理論を用いて地理学の理論化を図ろうとしたのである。イデオロギー的には異なるが、ある面で上述してきた生活様式批判における経済学主義に似ていないわけではない。ところで七〇年代に入って、理論・計量地理学の科学主義、還元主義が今度は批判される立場に立たされることになった。理論・計量化を推し進める中で、分析的で客観的な方法によって、失われた主観の立場の回復を求める人間主義は認識論の転換を要求する。我々はこの認識論的反省の場として「生活様式」を取り上げることができるのではないかと考えるのである。これがまたヴィダルの概念を現代に再生する途ではないであろうか。このための糸口を見出そうとするのが次節の課題である。

三　新たな生活様式論の展開を求めて

（一）カナダのフェルナン・デュモンは商品経済の認識論的見地に立って人間科学の批判的検討を行なう中で、空間表象の認識の学としての地理学の批判を試みている（Dumont, 1970）。彼は地理学の主要概念である景観、地域、生活様式を俎上に乗せ、地理学が専ら主観性によっていることからくる認識論的欠陥を指摘しつつ、伝統的地理学の迷路から人文地理学を救出すべく、生活様式概念を新しいコンテクストに捉え直す作業を試みている。結論を先取りしていえば、デュモンもこれまでの批判者と同じように伝統的地理学概念の曖昧さ（主観性）を経済学の認識論を用いた空間経済学（立地論）の中に救出策を見出すのである。これはある面では六〇年代の理論・計量地理学の運動と共通したところがあり、上に述べたように、この方向で生活様式を展開させる可能性を否定するものではない。しかしこれは生活様式を狭くしてしまうものであって、本来の生活様式を生かす別の道もありうるのではないかと考えるのである。デュモン本人の趣旨には沿わないであろうが、彼が伝統的地理学の性格付けを行なっている中に、この道の糸口を見出しうるのではないかと思われる。そこでまず、デュモンの地理学批判から見ていくことにしよう。

デュモンによれば、地理学が他の諸科学と異なっているところは実証的な価値を気ままに主観性と一致させていること、さらにそれを研究者の全パーソナリティーに一致させていることにあるという（Dumont, 1970, 116）。それは具体的には次のような地理学の特徴の中に表われている。たとえば、ヴィダルが人文地理学を分析的空間に対して「総体的複合体 complexe d'ensemble」の認識として提起したように、全体性の、しかも具体的総体の認識を目的としたことがそれであり、〈生活様式〉はその具体例である。デュモンは我々がすでに取り上げたジベールの生活様式の定義を引用しつつ、そこに地理学者の主観性がよくみられるというのである。ジベールの生活様式概念から即主観性を導き出すことは論理の飛躍があるようにおもわれるが、ともかくデュモンの考えを聞こう。彼によれば、地理学研究

者は生活様式に直感を結びつけ、受肉する。たとえば、「同一の景観の連続性を見分けるとき、地理学者は生活様式の同質性を知覚することによってそれを行なうのである。したがって、生活様式は分析的方法を解体するものである」(Dumont, 1970, 126) と地理学者の主観性、それの拠って立つ生活様式を批判する。

結局デュモンは生活様式のもつ二つの側面—これについてはすでにこれまでに何回となく述べてきたように、一つは習慣の総体としての生活様式が慣性として作用する面、他の一つは経済的なもので、空間に結びついた物質的な活動に係わる面—の二面であるが、これまでの批判者のように、その後者の面から生活様式の新たな展開を企てるのである。生活様式の概念は、これまでも種々の学者が述べて来たように、人間と環境との共棲である農村的な空間においてはなお有効性を持ち得るが、都市的空間においては決定的な障害にぶつかっている。この認識からデュモンは大空間の中に生活様式を取り入れることによって、その障害を乗り越えようとするのである。生活様式がすぐれて経済的な内容をもつことから、それに客観性をもたせることのできる大空間の中に置くことによって、地理的対象[10]は経済に規定された客観的複合体となって現われてくると主張する。このとき、デュモンによると地理学、形態学の二つの思考レベルが区別され、前者は地表に刻印された人間意志を明らかにすることを目指し、後者は生活様式の意味（作用）を再構成するための客観的基準を提供する。しかし、後者の客観的総体は、地理学的説明では、前者のレベルで追究される主観性の物象化としてしか理解されないであろうと主張される (Dumont, 1970, 137−38)。これは商品世界における論理と同じ展開であるところから、デュモンは経済学の認識論によって、生活様式の経済空間化を図るわけである。しかしデュモンが考えるように、ものと人間意志の弁証法は経済空間においてしか現われて来ないのであろうか。デュモンの著作に序文を寄せたL・ゴルドマンが、デュモンは経済理論を過大視していると評価しているように、あまりにも経済に拘り過ぎているのではないだろうか (Dumont, 1970, xii)。我々は物象化の論理によって、生活様式を経済空間化するデュモンの説に反論を企てようとするのではない。ある意味で彼の説が興味深く感じられる

のは、これまで取り上げて来た生活様式批判に欠けていた認識論的構制を明らかにしようとしているからであろう。しかし我々はデュモンが目論む主観性の客観化の方向ではなく、主観性を徹底化する方向で生活様式における認識論的構制を問題にしうるのではないかと考える。それを、逆説的ではあるが、デュモンの中から探っていこう。

地理学の主要概念の一つに景観がある。デュモンは、まず、景観とは地表上における人間の刻印の意味（作用）を研究者の主観によって、再構成したものに過ぎない、と断を下すのであるが[11]（Dumont, 1970, 121）、しかしそう簡単に言い切ってしまってよいのだろうか。なぜなら、彼がそれに引続いて述べている景観についての説明は必ずしも彼の言うようにはならないと思われるからである。デュモンはヴィダルを中心とした地理学における景観概念を分析したあと、結論として次のように述べている。「景観は外部から認識した全体空間の上に切り取られたものではない。それは予めあるもの（先取り prélèvement）として知覚されたものではなく、ある地平の上にそれ自ら切り取られた形態として知覚される」（Dumont, 1970, 125）。彼はこれを地理学者の主観性と捉えるわけであるが、この叙述は明らかに景観がゲシュタルト心理学でいう地と図の関係として把握されることを示している。さらにデュモンはこの図＝景観を取り出すことを可能にしてくれるのが例の「地的統一」であり、それが知覚を支える全体像となることを的確に指摘しているのはまさに卓見といわざるをえない。

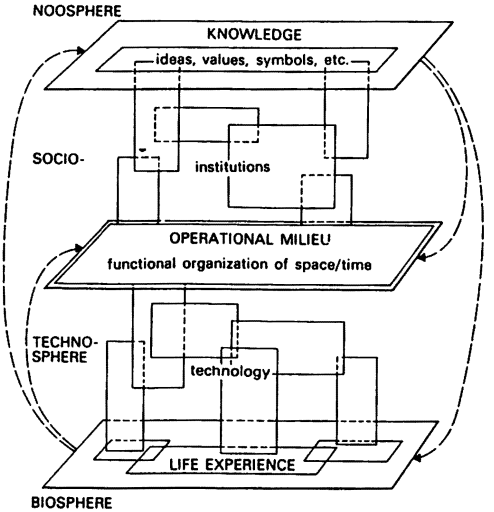
景観が決してデュモンのいうように単なる主観によるのではないことは彼が述べている次の文章からも明らかである。すなわち、「地理学者の景観把握は一つの共同認識 une communauté de connaissance であろうとする。それがまた複雑な共同認識であるのは、論理的には、それがその景観を生きている人々における一体感 unanimité と、また彼らと地理学者の間の一体感を仮定しているからである」（Dumont, 1970, 125−6）。景観はデュモンのいうように単に主観が再構成したものと考えるべきではなく、そこに生きている人々の間、さらに、それらの人々と地理学者との共同主観であるということである。このような捉え方はフランス学派成立期の地域研究においてすでにみられたもので、

そこにおける「ペイ」は「生きられる地域」として間主観的に把握されたのであった（野澤、一九八六）。

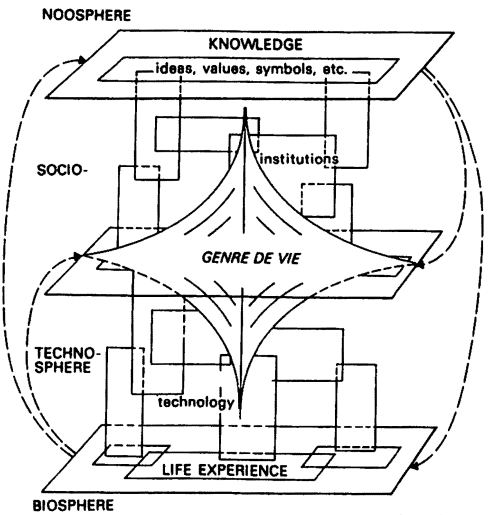
以上は景観の現象学的把握が可能であることを示唆したものであるが、景観は生活様式の第一の近似物といわれるように、上述して来たことは生活様式にも同様に当てはまることである。生活様式については上でみてきたように、様々な批判があった。ここで生活様式を現代に生かしうるのは奇しくもデュモンが批判した主観性—これは実は共同主観性なのだが—の面ではないかと考えられる。生活様式を農村においても都市においても、日常生活の世界として把握することである。人文地理学の反省の場をまずこの日常生活空間にもとめること、ここに生活様式を再生する道があるのではないだろうか。地理学においても生活様式を新しい認識論の場として再生すること、それはデュモンのいうような客観化された経済空間としてはなく、共同主観の場として、生きられる空間として捉えようとするものである。そのような視点から生活様式をみようとしているバッティマーについて簡単にみておきたい（Buttimer, 1978, 1981）。

（二）バッティマーはヴィダルの洞察力を再吟味し、彼の人文地理学において次の二点にフレームワークの再定式化の基礎を見出す。その第一はヴィダルの全体としてのフィールドの構造が二重ではなく三重構造をなしているとみられること、[12] 第二はヴィダルり地理学における環境と文明についてアプローチが、ディアレクチークであるよりはポリフォニーのメタファーであること、の二点である。

第一の全体のフィールドの構造が三重構造であるということは図1のように示される。すなわち、noosphere は観念、シンボル、イメージなどのあらゆる意識の特徴を統合するもので、いわゆる文明と呼び得るものである。次にバッティマーはヴィダルの複合的環境を自然的と人工的の二つの構成要素に分け、前者は一般的にいわゆる natural milieu であるが、それよりはもっと包括的な biosphere という表現を用い、後者の操作的環境 operational



（図 1）



Buttimer (1981) による。

（図 2）

environmentは socio-technosphere と命名した。そのうち後者の具体的表現が景観である。バッティマーはこの操作的環境をまた生活様式とも捉えている（Buttimer, 1981, 図2）。本来この全体構造が生活様式であろうが、バッティマーがそのように捉えるのは地理学の認識構造において、そこが実践の場にあたるからだろう。いずれにしても、地理学はこれら各レベルの相互の作用が問題になるわけで、生活様式を操作的環境に位置付けることによって、これら三つのレベルを相互に結びつける中心的位置にあることになる。従って生活様式は socio-technosphere とくに technosphere を介して biosphere に対し、また socio（institutions）を介して noosphere と関係するわけである。バッティマーによれば、様々の生活様式において各レベル毎に人間経験の諸相[13]が見出されるが、今日の研究はこうしたレベル毎にますます専門化する傾向にあるのに対して、ヴィダルのアプローチはそれぞれの環境の中での生活様式の研究、すなわち全体性の研究に特徴があった。この視点を現代の都市研究に生かすとすれば、同一環境の中で調和し、対立している生活様式の問題、たとえば全体としての都市空間構造のマクロな世界への関心とその都市内の居住地内のミクロな世界への関心との緊張関係がそれであろうという。しかし具体的にどのような方法をもってするのであろうか。これまでのバッティマーの主張は生活様式概念を構造化して見せたに過ぎないのであり、上に示した現代都市の生活様式は如何にして把握可能なのか。それはバッティマーがヴィダル地理学から汲み取る第二の点とも関係してこよう。それについてはバッティマーはヴィダルと現象学的思想の関係を問題にし、その類似性を指摘するに留まっているのだが、この視点に立って今一度さきの図1、2を見直してみよう。生活様式が実践の場として biosphere と noosphere を繋ぐ位置をしめていることは上で触れたが、それが一方では生活経験と知を結ぶ中間に位置するものであることが重要である。なぜなら、バッティマーが地理学(史)方法論で問題にしようとしたのは実証的方法の客観的方法（Rechnendes Denken）に対する異議申立てであって、彼女はそれに代わって現象学的方法（Besinnliches Nachdenken）を提起したのである。そこにおいて図2を理解すべきであって、生活様式はそこで生

活している人々の生活経験—それは地理学者も彼らと共感するものであるが—と知とを繋ぐ認識論的場を形成するということである。先にデュモンはそれを主観的として排除したのであったが、それは単なる主観ではなく、共同主観であったことを想起しなくてはならない。バッティマーはその認識論の構造を明らかにしようとしたのである。生活様式における認識的構制は哲学者に任せすればよいとしても、それに基づいた生活様式の諸相を把握するための方法論を切り拓くことが地理学者に要請されるのである。

おわりに

我々はフランス地理学の中心概念である「生活様式」の批判点を検討しつつ、当概念の現代地理学方法論における活性化の可能性を探って来た。従来の生活様式批判はヴィダルの概念とその研究成果をめぐって展開して来たといって過言ではない。それを整理すれば次のようになろう。

まずヴィダルの生活様式概念は第一に、人類が生物の一つとして自然と共同していく面、第二に、人類が次第に創意、工夫によって自然から解放され、集団の様式を作り上げて行く面、それはさらに、人間集団を規定する地理的因子として作用する面とがある。その内容は生活・生産手段を獲得し、それによって生存を維持していく物質的な面と習慣、宗教、儀礼のような制度的、心的な面とがあるが、いずれもが長年月の間に凝結した「習慣の総体」となったもので、それが人間集団の生活を導き、あるいは地理的因子として作用するのである。このように要約されるヴィダルの生活様式はすでに前稿であきらかにしたように、彼自身の研究においては生活様式が形成されていく際の、きわめて生物学的、生態学的なプロセスに力点が置かれたのである。一方その過程で人間の創意・工夫によって人間化されて行くのであるが、一度作り上げられた生活様式は慣性の力として作用する。この面ではあまり能動的ではないが、機能的な、生理的な作用をするものとして理解されている。しかし彼が実際に行なったことは生活様式を構成する要

素の組み合わせによる生活様式の諸類型を列挙し、接触によって、それらの生活様式が進化していく事例を提示したのである。以上の諸点に対して種々の批判が加えられることになったわけであるが、その批判の第一は、ヴィダルの人類とローカルな土地自然環境との結びつきを問題とする生物主義的概念に対して向けられる。自然と人間との共棲関係の強い旧社会の農村や未開社会ではあるいはなお生活様式は有効な概念であるとしても、社会的分業、職業の分化の進んだ近代社会では無力であるとする批判である。これはすべての批判者に共通した点である。ここで、社会的分業、職業分化の視点を入れて、生活様式概念を近代社会にも適用するように図ろうとした地理学者に、ジベールやソールがいたわけである。

しかし社会的分業や職業の分化は近代社会の本質ではなく、外面形態にすぎないとしてそれを批判し、社会・経済的構造、厳密には生産関係、生産様式に生活様式を置き換える、あるいは取って代えようとしたのが、ジョルジュ、飯塚、上野らである。経済空間に置き換えようとしたデュモンも、経済学の概念にとって代えようとする点では同じである。これらの批判者に共通しているのは生活様式のもつ生活・生産手段の側面を強調する点である。しかしヴィダルの生活様式概念は上に見たようにもっと包括的な概念である。ジョルジュは下部構造である社会・経済構造を捉えることによって、習慣、宗教、儀礼などの制度的、心的側面は上部構造として明らかにされるという旧来のマルクス主義的立場をとっていたが、それでは済まされない。ジョルジュ以下の批判は生活様式の内容の一部を経済学の概念によって狭小化するものであった。

ヴィダルの生活様式概念を生かす道はそれを経済学の概念に置き換えることではなく、七〇年代以降地理学の中で起こって来た認識論的転換の場として捉えてみることである。我々はその糸口をデュモンとバッティマーにみようとしたのが第三節の試みであった。生活様式はデュモンが批判するように単なる主観性の場ではなく、共同主観の場として認識されるべきであり、彼が考えるように経済空間化するのではなく、生きられる空間として把握すべきことを

提唱したのである。このようにして、我々は現代の生活様式を捉えることが可能であるとしても、なおその方法論については不透明のままである。この現象学的立場に立った地理学方法論を確立して行くことが今後の課題となろう。

注

(1) ソールによればヴィダルの慣性化は内的進化だから、ヴィダルにも生活様式の内的原因があったという。ヴィダルが慣性化を生活様式の進化とみていたかどうかは疑問である。

(2) ジョルジュによればこれらは異なった方法であって、選択の問題ではないという（George, 1951, 74）。

(3) 以上のように飯塚は人文地理学の歴史をリッター→ラッツェル→ヴィダルと発展段階的に把握し、これを地理学史の正当な流れと位置付けている。こうした一種の英雄史観的な地理学史把握には問題があろうが、ここではこの問題はこれ以上触れないでおく。

(4) 飯塚は地理学を「地表に基礎を於て営まれるところのわれわれ人類の生活にかかわる学問」（飯塚、一九四七、二三、一九六八、八七）、と規定し、さらに詳しく「これを（人類の社会生活）外囲の自然的条件、いわゆる地理的環境との関係において観察すべき必要があり、余地がある限り、この役割こそ地理学に帰せらるべきであって、ここに地理学の御奉公すべき、最適の職域があるということは、おそらく何人にも異議のあり得ないところであろう」（飯塚、一九三二、四四―四五、一九六八、一〇〇）と。

(5) 上野は後にみるように、マルクスの様式概念の発展と絡め、ヴィダルの生活様式概念をマルクスの最も下位にある概念に当るものと想定しているように思われる。

(6) 上野が生活様式を他の耕作様式や輸送様式と同列にみているとすれば、生活様式の〝生活〟は常識的な意味の生活にとっている虞がある。

(7) このことは上野自身も気づいており、「原理の全巻は社会生理学ともいうべきものとその形態学で貫徹されている。ただ叙述の形式が形態学を前面にだして展開されているので、その生理学が行間の奥にかくれてしまって、素朴なる読者にとらえどころがないという印象を与えるのである。しかし慧眼なる読者はその生理論（??）、地理学の体系として考えれば一般地理学の論理体系を読みとっておられるであろう」（上野、一九六八、二六）、慧眼ならざる筆者にはそこまで飛躍して読みとることはできない。

(8) 社会的慣性の力を重視した次の文章はヴィダルの思想をよく示している。「人間の社会的本性において、習慣の力が大きな役割を果たしていることを想起しなければならない。人間が改善を欲するという点で、本質的に進歩主義者であるとしても、彼が歩む道は常に、すでに引かれた線、すなわち、先行する世代からの遺産によって、強固なものとなった習慣が、自らのなかに形づくった特殊な技術的素質によって方向づけたものなのである。」（Vidal de la Blache, 1902, 22–23, 訳は竹内（一九七五、八〇）。

(9) 上野はこの文章を別の箇所で引用しているが（上野、一九六八、二九）、ヴィダルはこの文章において、自然界の認識を深めることで、自然界におこっている変革を詮索する手段を見出していくといっているのである。そして、現在は科学の力によって、これまでに人間が蓄積してきた以上の痕跡を地表に刻みつけ、植民地開拓を成功裡に導いて来たとするのであって、上野はヴィダルの真意をどうも誤って解釈しているようである。

(10) デュモンによれば、地理学的対象 objet géographique とは自然的制約と人間的意志を構成要素としており、生活様式はこれらの相互関係を弁証法的に受肉したものであり、景観はその第一の近似物とされる（Dumont, 1970, 137）。

(11) 地表上における人間の刻印の意味とは上に指摘されたように、自然的制約と人間意志との相互作用の弁証法的受肉化（統一）である。

(12) 我々が上でみてきたように、ヴィダルにおいては環境と文明、あるいは環境と人間意志、さらに生活様式における構成のように二重構造になっているとみられる。

(13) たとえば、noosphere における認知的／情動的、socio-technosphere における相互作用的／間主観的、biosphere における有機的／領土的など、である。

参考文献

Berdoulay, V. 1981: *La formation de l'école française de géographie 1870–1914.* Bibliothèque Nationale, 245 p.

Broc, N. 1970: Histoire de la géographie et nationalisme en France sous la IIIe République 1871–1914. *L'Information historique,* 32, 21–26.

Buttimer, A 1978: Charism and context: The challenge of *La géographire humaine.* In Ley, D. and Sammuels, M. (eds): *Humanistic geogrphdy; Prospects and problems.* Chapter 4, 58–76.

Buttimer, A. 1981: On people, paradigms, and "progres" in geography. In Stoddart, D. (ed): *Geography, ideology, and social concern.*

Chapter 6, 81–98.

Claval, P. et Juillard, E. 1967: *Région et régionalisation dans la géographie française et dans d' autres sciences.* Dalloz, 97 p.

Derruau, M. 1969: *Nouveau précis de géographie humaine.* A. Colin. 576. p. 〃 Livre troisième, La notion de genre de vie, Les mécanismes et les systèmes économiques. Introduction, la notion de genre de vie: expose et critique. 111–117.

Dumont, F. 1970: *La dialectique de l'objet économique.* Editions Anthropos, 385 p. 〃 Chapitre 3, La représentation de l'espace, 115–148.

George, P. 1951: *Introduction à l'étude géographique de la population du monde.* P. U. F. 〃 Chapitre V, Systèmes d'organisation économique et sociale et population, 69–86.

Gibert, A. 1948: Les genres de vie dans le monde moderne. In *Mélanges géographiques offerts en hommages à M. Daniel Faucher: France méridionale et pays ibériques*, Toulouse, 259–270.

Gottman, J. 1947: De la méthode d'analyse en géographie humaine. *Annales de Géographie, 56*, 1–12.

Lacoste, Y. 1964: Perspcetive de la géographire active en pays sous-dévéloppé. George, P. et al. *Géographie active*, P. U. F. 394 p. Deuxième partie, 43–168. 木尾至行他訳 一九六八『行動の科学としての地理学』大明堂。

Le Lannou, M. 1949: *La géograhie humaine.* Flammarion, 252 p. 〃 Sur la notion de genres de vie, 147–151.

Meynier, A. 1969: *Histoire de la pensée géographique en France 1872–1969.* P. U. F. 224 p.

Sorre, M. 1948: La notion de genre de et sa valeur actuelle. *Annales de Géographie, 57*, 97–108; 193–204.

Sorre, M. 1952: *Les fondements de la géographie humaine, T. III, L'habiat, conclusion générale.* A. Colin. Chapitre I, La notion de genre de vie et son évolution. 11–37.

Takeuchi, K. 1984: Two Outsiders: An Aspect of Modern Academic Geography in Japan. In K. Takeuchi (ed): *Languages, Paradigms and Schools in Geography*, 88–100.

Thibault, A. 1972: L'analyse des espaces régionaux en France depuis le début du siècle. *Annales de Géographie, 81*, 129–170.

Vidal de la Blache, P. 1911: Les genres de vie dans la géographie humaine. *Annales de Géographie*, 20, 193–212; 289–304.

飯塚浩二　一九三二『社会地理学の動向』。刀江書院、一一三頁。後に、飯塚（一九六八）および飯塚（一九七五）に収録。
飯塚浩二　一九四〇／七〇　解題。『人文地理学原理』岩波文庫。後に、飯塚（一九七五）に収録。
飯塚浩二　一九四七『地理学批判—社会科学の一部門としての地理学—』。帝国書院、二〇九頁。後に、飯塚（一九六八）および飯塚（一九七五）に収録。
飯塚浩二　一九四九『人文地理学説史—方法論のための学説史的反省—』。日本評論社、二一三頁。後に、飯塚（一九七五）に収録。
飯塚浩二　一九五〇『人文地理学』。有斐閣、四〇〇頁。後に、飯塚（一九七六）に収録。
飯塚浩二　一九六八『地理学方法論』。古今書院、二四二頁。
飯塚浩二　一九七五『飯塚浩二著作集』第六巻。平凡社、五〇九頁。
飯塚浩二　一九七六『飯塚浩二著作集』第七巻。平凡社、五七六頁。
入江敏夫　一九七五　解題。『飯塚浩二著作集』第六巻。平凡社、四九四—五〇七頁。
松田　信　一九五五　フランス学派における生活様式概念の発展。『三重大学学芸学部研究記要』、一四、九六—一〇九頁。
松田　信　一九六一　生活様式論再考。『人文地理』、一三、二九—四八頁。
野澤秀樹　一九六七　最近のフランスにおける地理学研究。『人文地理』、一九、二八九—三〇五頁。
野澤秀樹　一九八六　フランス地理学派成立期の地域研究—とくにペイ（pays）の研究について。『地誌学を考える—戸谷　洋先生退職記念地誌学論文集』、古今書院。一六—三五頁。
野澤秀樹　一九八七　環境と文明—ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ地理学研究のための覚書『東アジアの考古と歴史　上巻—岡崎　敬先生退官記念論文集』、同朋社。七三七—七六五頁。
岡田俊裕　一九七五　飯塚浩二の地理学史研究。『地理科学』、二二、一六—二四頁。
岡田俊裕　一九八一　戦後初期における飯塚浩二の地理学論。『地域—その文化と自然』（石田　寛教授退官記念論文集）五〇八—五一七頁。
水津一朗　一九七一　飯塚浩二と人文地理学。『人文地理』、二三、六一九—六四五頁。
谷岡武雄　一九五五　フランス学派における生活様式の概念。『立命館文学』、一二二、一—二四頁。
上野　登　一九六八『経済地理学への道標』。大明堂、一八九頁。

付　記　本研究をまとめるにあたって、昭和六一・二年度科学研究費（総合研究A・代表者中村和郎、『日本における生活空間組織と環境観の変遷』）を使用した。